

## “SUZUKI”から“ICHIRO”へ —2001年アメリカ・メジャーリーグ序盤戦における 鈴木一朗（イチロー）とメディア報道<sup>1)</sup>—

川 島 浩 平

はじめに

シアトル・マリナーズの鈴木一朗（以下イチロー）がアメリカ・メジャーリーグでの2年目のシーズンを終えた<sup>2)</sup>。後半打撃不振に陥り、昨シーズンの勢いは見られなかったとはいえ、今シーズンも賞賛すべき実績を数多く残した。昨年度同様、最多得票でオールスター出場を果たし、2年連続で200本安打を達成。リーグでの最終成績は、打率4位（647打数208安打.321）安打数2位（208）、得点9位（111）、盗塁4位（31）、出塁率10位（.388）、敬遠数1位（27）であった<sup>3)</sup>。

イチローは、2001年4月2日の開幕以来、メジャーリーグという檜舞台でコンスタントに好成績を収め、現在に至っている。今振り返ると、彼の成功は初めから約束されていたかのようにさえ見える。しかしながら、彼の栄光への道のりは決して平坦ではなかった。このことに、今改めて注意を促したい。確かに野茂英雄<sup>4)</sup>や佐々木主浩<sup>5)</sup>らが先発や火消し役の投手として、成功を収めてはいた。しかしどちらも、日本人プレーヤーの打力を保証したわけではなかった。次節でみると、「日本人にはパワーがない」とする見解がアメリカの専門筋に根強く存在し、イチローに対する評価はせいぜい「並み以上」という、実際の成績に照らすと著しく低いものであったというのが実情である。

この事実に鑑みると、イチローの実績は尚一層、快挙として輝きを増すといえないだろうか。そしてそれゆえ、いつ、なにゆえに彼に対する評価が変化し、定着したのかを見極めることが意義を帯びることになる。

本稿は、ベースボール関係者の懷疑論や消極的予測にもかかわらず、イチローが見事なプレーによってファンを虜にし、最も否定的であったメディアの評価をさえ逆転させるに至った、2001年の4月から5月に焦点を当て、報道にみられた変化のプロセスを検証することを目的とする。そのためにはまず一節にて、開幕前の評判や評価を整理し、その特徴を浮かび上がらせる。次に二節にて、デビューから5月末までの彼の活躍を、時系列、種類別に配置し、解説する。その上で三節にて、同期間の報道での修辞や言葉遣いなどの表現上の特徴と、解釈や評価などの内容を検討する。それらにおける主要な変化のパターンを抽出することで、その多様性と共通性についての考察を試みたい。最後に、以上の分析の結果をまとめ、今後の課題を提示する。

## 1. 2001年シーズン開幕前の実績と評価

2000年11月30日、イチローはマリナーズと正式に契約を交わし、11番目の日本人メジャーリーガーとなった。その第一号は、1964年に南海ホークスからサンフランシスコ・ジャイアンツに野球留学をした村上雅則<sup>6)</sup>、第二号は村上の入団から31年後の95年に、近鉄バファローズを任意引退し、ロサンゼルス・ドジャースに入団した野茂英雄である。以後野茂の成功が呼び水となり、後を追うものが次々と現れた<sup>7)</sup>。その中には、アナハイム・エンゼルスで中継ぎとして活躍し、2002年からマリナーズに所属する長谷川滋利<sup>8)</sup>や、マリナーズのストッパーとして2000年シーズンに37セーブをあげた佐々木主浩らがいる。

イチロー以前の日本人メジャーリーガーは、ことごとく投手であった。イチローは、阪神タイガースでフリーエージェントを宣言し、彼のメジャ

一リーグ移籍発表から約2ヶ月後にニューヨーク・メッツと契約を交わした新庄剛志<sup>9)</sup>と共に、野手として初の日本人メジャーリーガーという栄誉を分かち合うこととなった。日本人のメジャーリーガー野手の誕生がかくも遅れをとった理由の一つは、後でみるよう、「パワーに劣る日本人打者はメジャー投手には通用しない」とする見方が存在したからである。

イチローは、1999年の2月から3月にかけて、アリゾナ州ピオリアでのマリナーズのスプリングトレーニングに参加している<sup>10)</sup>。この経験が、マリナーズを希望する一つのきっかけになったともいわれる。しかし、当時は、アメリカ関係者に強い印象を与えるようなプレーを見せることができなかった。食中毒による体調不良という不運も手伝って、打席に立ったのは6回のみ、引っ張る打球は一つもなかった。このことは、パワー不足の証拠としてその後しばしば言及されることになった。当時のマリナーズ・スカウト陣は、守備力と走力にこそ高い評価を与えたが、打撃に関しては「最初のシーズンに2割7分から8分」という判断を下した。この数字は、その後のイチロー予測に一つの根拠を与えることになる<sup>11)</sup>。

2000年秋、イチローが所属したオリックス球団は、彼の金銭トレードによる移籍を認め、メジャー球団との交渉に入った。ニューヨーク・ヤンキースやドジャーズなど、潤沢な資金力を有する球団が次々と打診を行ったが、入札の結果、1,312万5,000ドルを提示したマリナーズが交渉権を獲得した。11月、三年契約、出来高払いを含めて1,408万8,800ドルという条件を受け入れ、イチローは晴れてマリナーズの一員となった。

この時点での、イチローへの期待の程を推し量ることのできる一つのエピソードがある。当時代理人トニー・アタナシオが、「MVP獲得のインセンティブ（出来高ボーナス）を」と申し出ると、その可能性を低いと見たマリナーズのフロント役員たちは、一斉に笑みを浮かべ、「ご自由にどうぞ」と返答したのである<sup>12)</sup>。

「日本最高の打者」という前評判とは裏腹に、スプリングキャンプからオープン戦を通じて、日米関係者のイチローを見る目は厳しかった。だが

それも無理はない。彼がメジャーで成功するには、乗り越えなければならぬ壁がいくつもあるとみられていたからである。日本より20数試合も多い過密なスケジュール、国土の広いアメリカでの移動、言葉の障壁や食事のちがいなど、どれもアメリカへの適応を困難にし、彼の足を引っ張るであろうと予想された。内野手の肩の力がケタ違いのメジャー選手を相手にしては、彼の売り物の一つである内野安打の多くが封じられてしまうだろうともいわれた<sup>13)</sup>。

ルー・ピネラ監督をはじめとするマリナーズ首脳陣は、イチローのバッティング技術に一目置いてはいた。しかし全幅の信頼を寄せたわけではなく、不十分、不満足と見なした点については率直に意見を述べた。時には直接要求を伝えた。

このことを示す端的な例に、レフト方向へ流すバッティングについてのやりとりがある。オープン戦最初の46打席、イチローの打球は外野に届くことがなく、ショートやサードへの凡打が続いた<sup>14)</sup>。3月8日、ジャイアンツとの試合に2対1で敗北したこと、ピネラはシアトル・タイムズの記者ボブ・シャーウィンに、「イチローは球を飛ばそうとも、強打しようともしない。できれば、そんな打ち方はやめてほしいね」と語ったという<sup>15)</sup>。ジェラルド・ペリー打撃コーチから、「引っ張るように」との指示に対するイチローの返答が要領を得ないという報告を受けると、ピネラは声を荒げて、「じゃあ、あのクソガキにいっとけ。何を考えてあんなことやってるのか教えてくれなきゃ、こっちは夜も眠れないってな」と言い放った<sup>16)</sup>。そして遂に、「一度、引っ張ってくれないか。引っ張れるところを見せてもらえないかな」と直接伝えたという<sup>17)</sup>。

快音を響かせないイチローのバッティングについて、メディアは「左方向の打球が多いのは、スピードに差し込まれているからだ」と書き立て、他球団のスカウト陣は、「日本の安打製造器は、パワーとスピードで優るメジャーでは力のある速い球は引っ張れない」との結論を下した。対戦相手の首脳陣は「走りながら打つ、あのフォームを変えない限り、95マイル

の速球は打てないだろう」と分析した<sup>18)</sup>。

オープン戦が終盤にさしかかると、イチローの打棒は精彩を取り戻した。3月20日の試合では、レフトオーバーの二塁打二本と左中間へのホームランを放った<sup>19)</sup>。ライト方向に引っ張る打撃もしばしば見せるようになつた。結局オープン戦の通算打率は、3割5分5厘であった。イチローはマリナーズ首脳陣の不安を、自らのバッティングで解消したかに見えた。しかしその時点でさえ、ピネラの期待は「メジャー1年目というハンディを考えれば、3割残せばラッキー。2割8分が順当なところ」という程度にとどまっていたのである<sup>20)</sup>。

マリナーズの外部に目を移すと、そこでイチローを待ち受けたものは、せいぜい好意的な関心であり、彼と彼の代表する日本の野球に対するあからさまな侮蔑さえ存在した。

大きな期待を抱いたものがいなかつたわけではない。元ドジャース監督のトミー・ラソーダ<sup>21)</sup>は、「イチローは今まで十分にメジャーで通用する。彼のバッティングフォームは日本では独特かも知れないが、アメリカではみんなそれぞれ個性的なスタイルで打っている。まったく問題ない。メジャーでも3割は必ず打てるよ」と、既に1995年の時点で太鼓判を押していた<sup>22)</sup>。メッツ監督を務めたボビー・ヴァレンタイン<sup>23)</sup>は、マリナーズ入団の際にイチローを「世界で5本の指に入る名選手の一人」に數えた<sup>24)</sup>。しかし、アメリカ球界関係者全体からみると、このような評価は例外中の例外であった。

メジャー他球団の選手、スタッフ、アメリカ人ジャーナリストの評価は一様に厳しかった。現在ヤンキースで3番を打つジェイソン・ジアンビー<sup>25)</sup>は、「私自身は彼がアメリカでもスーパースターになれると信じている」と持ち上げつつ、「アジャストしていかなければならることはたくさんある」<sup>26)</sup>と語り、シカゴ・ホワイトソックスのフランク・トーマス<sup>27)</sup>は、「ホームベース越しにダイブしてくる彼の打ち方は問題だ。ああやつてインコースを塞ぐなら、内角球で死球を当てられても文句は言えな

い」<sup>28)</sup>と警告した。メッツの日本人スカウト、オオジマ・イサオの予想は、「メジャーリーグに慣れれば1年目から2割8分を打てるだろう」<sup>29)</sup>というものだった。

日米の野球事情に詳しいスポーツジャーナリスト、ジム・アレン<sup>30)</sup>は「日本の、つまり、ピッチャーは優れているがバッターはたいしたものがない国の出身」であるイチローの、「これほどの成功を予想していた者は誰一人いなかった」とし、「多くの人々が、日本の打撃王に対するマリナーズの投資を、ひいきめにみてもリスクがあると感じた」と指摘する<sup>31)</sup>。『オークランド・トリビューン』紙のマーク・サクソンは、スプリングキャンプの時点で、もっと露骨に、「非力なリードオフマンにマリナーズの投資は高すぎたね」と述べている<sup>32)</sup>。

映画『フィールド・オブ・ドリームス』の原作者として知られるW・P・キンセラ<sup>33)</sup>もこれに同調する。「その頃のイチローの評価は、アメリカではそれほど高くなかった。守備力と足の速さはいいらしいが、打率は3割いくかどうか。私の評価もその程度のものであった」、「日本で、7年連続首位打者になったといっても、日本の野球界での話だ。メジャー・リーグではそうはいくまい」<sup>34)</sup>と思っていたという。

マリナーズの地元紙『シアトル・タイムズ』でスタッフレポーターとして健筆をふるうシャーウィンの第一印象も同様だった。「この青年は、日本の球団からマリナーズに移籍し、メジャーリーグで初の日本人野手になれると考えているらしい。そりや無理な話だ」<sup>35)</sup>、「イチローは『自分の腕が細い』ことをみずから認めた」、「セーフコ・フィールドは大きな球場なので、この細い腕ではとてもホームランを打てるとは思えない」<sup>36)</sup>、など当時の気持ちを正直に告白した。

全体としてみると、アメリカ専門筋の大河の予想は、打率2割8分前後、守備と走塁でそこそこの活躍という線にとどまっていた。

イチローに対してもっとも批判的だった一人に、元メジャーリーグのピッチャーで、ESPN<sup>37)</sup>のコメンテータであるロブ・ディブル<sup>38)</sup>がいる。イ

チローは絶対に成功しないと自信満々だった彼は、2001年2月20日の『シアトル・ポスト=インテリジェンサー』紙で、「もし彼が首位打者をとつたら裸でタイムズ・スクウェアを走ってみせるし、三割をうただけでも、競泳用の水着姿でおなじことをしてみせる」と宣言した<sup>39)</sup>。6月22日の時点では、ピネラはディブルに「そろそろ日焼けの準備をはじめるほうがいいぞ」と語った。結局、ディブルは約束を果たすはめになったという。

日本人関係者の中には、イチローの成功を信じる力強い味方もいた。「振り子打法」と呼ばれる独特のバッティングフォームをイチローと共に作り上げた、元オリックス二軍打撃コーチの河村健一郎<sup>40)</sup>がその人である。河村の予想は「3割3分から3割5分の間」で、他と比べて極めて高い水準にあった。しかし、河村自身が認めるように、まわりには「1年目からそんなに打てるか?」という反応が多かったという<sup>41)</sup>。日本の解説陣がはじきだした数字は、「まあ、3割くらいじゃないかな」<sup>42)</sup>という角盈男の予想を上限に、だいたい2割台の上の方に集中していた。イチロー一番記者グループも、イチローのメジャー挑戦には半信半疑で、「ある程度はやれるかもしれない。だが3割は難しいのではないか」<sup>43)</sup>と見ていた。要約すると、日本人の期待は、アメリカ人のそれを上回るものでは決してなかったといえるだろう。

日本人関係者は、過去7年間のイチローを知り尽くしていたにもかかわらず、アメリカ関係者同様、彼の実力を正確に見通すことはできなかったことになる。しかし、このことを責めることはできない。むしろ日本人がこれまでメジャーリーグに対して抱き続けてきた劣等感が、その目を曇らせたといえるかもしれない。スポーツライター小川勝<sup>44)</sup>の言葉を借りるならば、日本人はメジャーに対して「現実以上のファンタジー（幻想）」を抱いてきた<sup>45)</sup>のであり、その起源は実に古いものである。

敗戦から4年後の1949年、当時の全日本や読売ジャイアンツはトリブルAのサンフランシスコ・シールズを迎えて6戦し、全敗を喫した。トリブルAにさえ歯が立たないのだから、メジャーリーグは雲の上の存在だ、

というのが実感だった。その後、メジャーリーグを代表するチームをしばしば招待し、最強の全日本チームを組んで対戦したが、実力差を思い知られるのが常だった。他方、ランディー・バース<sup>46)</sup>やブーマー・ウェルズ<sup>47)</sup>といったメジャーリーグで通用しなかった選手が、来日して大活躍をしたり、ぱりぱりのメジャーリーガーだったボブ・ホーナー<sup>48)</sup>が衝撃的なデビューをして、日本中をあつといわせたりした。このような経験を積み重ねてきた日本人だからこそ、イチローの前途に対して楽観を許すことができなかつたともいえるだろう。

オープン戦を終えた3月29日、ピオリアキャンプの打ち上げの席で、イチローの自信のほどを窺わせるやり取りがあった。コロラド・ロッキーズのエース、マイク・ハンプトン<sup>49)</sup>について「ハンプトンに失礼かもしれませんが、これだったら運がよければ打てるだろうという感じはありますか」という日本人記者の質問に対し、「運がよければというのは僕に失礼だと思うんですけど。どうにもならないということはない。いいピッチャーだとはもちろん感じましたけど、じゃあどうにもならないかというとそうではない」<sup>50)</sup>と答えたという。イチローはまた、「この場所でやることはやったつもりです。野球そのもののレベルは高いと思うが、どうにもならないものではない。早くグラウンドに立ちたい。思いっきり暴れてみたい」<sup>51)</sup>と述べ、彼の決意と意欲をのぞかせた。

しかしプロ野球という世界では、3月の夢がいとも容易に4月の失望へと変わりうることを、私たちは知っている。イチローが名実ともにメジャーの一員となれるかどうかは、結局のところ、開幕後、彼がどのような実績をあげるかにかかっていたのである。

## 2. 序盤戦での活躍

2001年4月2日、強敵オークランド・アスレチックスとの開幕第1戦で2つのシングルヒットを打ち、イチローはデビューを飾った。その後もほ

ほぼ連日安打を重ね、第4戦には初本塁打も放った。4月11日には、「ザ・スロー」と呼ばれることになる捕殺プレーで全米を沸かせ、15日には初盗塁を成功させた。リードオフマンの大活躍でマリナーズは連戦連勝、4月下旬に9連勝、5月中旬に8連勝、下旬からは15連勝を記録。イチローは、セーブポイントを着々と積み重ねる佐々木とならんで、チームの驚くべき快進撃の立役者となった。

開幕後2ヶ月の時点でのイチローに対する評価は、次の二つの栄誉に象徴されているといえよう。一つは、4月、5月両者におけるアメリカン・リーグ月間最優秀新人賞の受賞である。そしてもう一つは、5月29日に発表されたオールスターファン投票の第1回中間報告で、アメリカン・リーグ外野手として堂々第2位につけたことである。(この後、6月4日の第2回中間報告では第1位に躍り出て、その地位を譲ることなく夢の球宴に至った)。本節では、この期間にイチローがみせた技能とプレイに焦点をあて、具体的な事例を織り交ぜながら、その特長を走塁、守備、打撃という3つの分野別に紹介する。

### (1) 「塁間3.7秒」の驚異

イチローの走力は、キャンプ時からスカウトの間で既に話題的だった。そして開幕戦の見事な走塁によって、一挙に全国のベースボールファンに知れ渡ることとなった。

対アスレチックス開幕戦の第1打席、イチローはセカンドゴロに倒れた。しかしこの時、スカウトたちはイチローが一塁に駆け込むまでの時間を計っていた。3.85秒。メジャーリーグでは、普通俊足の左打者で4.2秒、俊足の右打者で4.3秒といわれている。アウトとわかりきった凡ゴロでさえ、このタイムでファーストに到達した快走は驚異として受けとめられた。そして第5打席、ピネラの指示を受けての送りバント成功。「見事な送りバントだった。あれ以上のバントはない」<sup>52)</sup>とピネラを絶賛させたこの時、一塁ベースに達するまでのタイムはなんとたったの3.7秒だったのである。

この時の疾走は守備の乱れを誘い、結局内野安打となった。

けれども、驚異の快足にもかかわらず、走力のもっとも確たる証である盗塁面では、やや出遅れた観があったことは否めない。イチローの初盗塁は開幕から12試合が経過した4月15日、対エンゼルス戦のことだった。「盗塁王となった選手の中では、いちばん遅いスタートだった」<sup>53)</sup>という指摘すらある。初戦からの大活躍に、連日ご満悦だったピネラでさえ、「唯一イチローに見せてもらっていないのは盗塁だよ。塁に出たら、もう少し積極的になってほしい」<sup>54)</sup>とこぼしたという。

しかしこの日、第5打席で10試合連続安打となるレフト前ヒットを放った後、ノーサインから初盗塁を決めた。その4試合後には2個目、2試合おいて3個目を成功させた。4月の通算盗塁数は5、5月は12、6月は10、7月は9、8月は6、9月は11、10月は3であった。これらの数字から、8月に若干ペースが落ちたものの、シーズンを通してほぼコンスタントに盗塁を稼ぎ出したことがわかる。かくしてイチローは、シーズンが終了した10月7日に、総数56で盗塁王の栄冠を手にしたのである。

## (2) 「ザ・スロー」と「エリア51」

イチローの守備力は、走力同様、早い時期から球界関係者の注目を集めていた。しかし、彼の強肩の認知度を一気に全国レベルに引き上げたのは、4月11日の対アスレチックス戦で見せた一つの捕殺プレーだった。

マリナーズが3対0のリードで迎えた8回表、イチローは先頭打者として代打で登場し、シングルヒットを飛ばした。その裏、レンズ・ロング<sup>55)</sup>は先発アーロン・シーリー<sup>56)</sup>からシングルヒットをお返しした。ワンアウト後、代打レイモン・ヘルナンデス<sup>57)</sup>が一、二塁間を破る痛烈なゴロのヒットを打つと、ロングはファーストを飛び出し、迷わずセカンドを回ってサードへむかった。その時、ライトのイチローは、ボールをすくい上げると、すばやく右手に持ち替え、サードめがけて矢のような送球をした。

実況アナウンス：「ヘルナンデス、ライト前ヒットです。テレンス・ロングは二塁を回って三塁へ、イチローは三塁へ送球、すごい、レーザービームのようなストライク送球で三塁アウトです。これ以上の送球があるでしょうか、完璧、完璧、そう完璧な送球です。『ウァオ（“WOW”）』という以外言葉がありません、ウァオ！」<sup>58)</sup>

マリナーズ陣営も、この好返球には驚嘆した。ピネラは「洗濯物をいっぱい干せそうなスローイングだったよ」とのコメントを残した。二塁手としてカットプレーの位置にいたブレット・ブーン<sup>59)</sup>はこう言った。「ボールが耳の脇を通りすぎる音を聞いていただけだ。ロングがサードに走っていくのが見えた時、こう言ったんだ。『アウトだ。決まりだぜ。おまえはアウトだ。』そしてそのとおりになった。」サードで返球を受け、ロングにタッチしたデービッド・ベル<sup>60)</sup>のコメントはこうである。「本当にすごい遠投だ。びっくりして、ほうっと突っ立っちゃったね。」<sup>61)</sup>

『シアトル・タイムズ』紙のボブ・フィネガンは「これまで見た最高の送球を思い出し、それを忘れて欲しい。この送球はそれに勝るとも劣らないのだから」<sup>62)</sup>と書いた。『シアトル・ポスト=インテリジェンサー』紙のジョン・ヒッキーは次のように記した。「イチロー・スズキは、額に入れてルーブル美術館の『モナ・リザ』の隣りに飾っておきたいほどの送球をライトでみせてくれた」<sup>63)</sup>。そして、やがてこの200フィート（約61メートル）の遠投が成し遂げた捕殺プレーは、「ザ・スロー」として語り継がれことになるのである。この一投は、イチローの肩が評判以上の超一級品であることをアメリカ球界に知らせるものであった。

シーズンを通してみると、イチローの捕殺数は8つで、決して多くはない。新庄と比較しても、4つも少ない。このことは、むろん新庄の野手としての非凡ぶりを物語るものではあるが<sup>64)</sup>、イチローの守備力が新庄より劣ることを意味しはしないといわれる。強肩の野手にボールが渡ると、対戦チームの走塁コーチが慎重になり、捕殺の機会そのものが減少するからである。だから強肩ほど、最高捕殺数の記録をつくらないとされる<sup>65)</sup>。

レイザービームの威力ゆえ、ランナーは敢えて走らなくなつた、というのが真相ではなかろうか。

捕球面でみせたイチローの離れ業もまた、枚挙にいとまがない。「ザ・スロー」から2試合後のエンゼルス戦でイチローは、8回にライトフェンスによじ登り、ティム・サーモン<sup>66)</sup>の打ったホームラン性の大飛球をもぎ捕つた。捕球後、直ちに向き直つて一塁に返球、走者オーランド・パルメイロ<sup>67)</sup>を刺した。これにはエンゼルスのマイク・ソーシャ監督も、「難度の高いプレーをいとも簡単そうにやってのける」と舌を巻いたといふ<sup>68)</sup>。5月28日のカンザスシティ・ロイヤルズ戦では、4回にマイク・スウェーニー<sup>69)</sup>のホームラン・ボールを、フェンスにぶつかりながら好捕した。試合後イチローは、「あれはフライでした。だから捕つたんです」と淡々と語つたといふ<sup>70)</sup>。

イチローが守るライトフィールドは、それまで、イチローの前任者ジェイ・ビューナー<sup>71)</sup>の愛称「ボーン」（彼のトレードマークのスキンヘッドが骨（bone, ボーン）に見えることから）にちなんで「ボーン・ヤード」と呼ばれていた。しかしながら、イチローの背番号にちなんで「エリア51」と称されるようになった。もともと「エリア51」とは、ニューメキシコの辺鄙な地域にあり、軍が開発した新型ミサイルの試射や科学技術の最先端をいく実験が行われるという、秘密の地帯のことである。この一帯では厳重な警戒態勢ゆえ、何一つ潜り込めず、潜り込んだものは消息を絶つといわれる。それと同じように、イチローの守備があらゆる飛球やゴロを適切に処理するとみた球界通が、いつのまにかこのような名称を定着させたのである<sup>72)</sup>。

### (3) 「魔法使いの杖」の威力

打撃面でのイチローは、「魔法使い（Wizard）」という、これも名誉となるニックネームを与えられた。シーズン開幕後、わずか数週間の時点で、球団関係者全員が着るようにと、マーク・マクレモア<sup>73)</sup>がTシャツを作

ってきた。その胸にデザインされていたのが、チームメイトがイチローにつけたこのニックネームだった<sup>74)</sup>。魔法の杖で次から次へとヒットを生み出す魔法使い。そんなイメージは、屈指のバットマン、イチローにまさにふさわしい。

『スポーツ・イラスト레이ティッド』誌が伝える、2001年の5月におきた一つのエピソードは、当時のイチローの魔法使いぶりを伝えるものである。トロントのピアソン国際空港のこと。

マリナーズのチャーター便はピアソン国際空港に到着した。税関等の手続きを待つ間、みんな退屈していた。カナダの税関を通過、荷物がでてくるのを待っている。マリナーズのペリー打撃コーチが退屈凌ぎに名案を思い付いた。彼は、みんなから1ドル札を集めると、回転式コンベアーから最初に出てきた荷物の持主に、賞金を授与すると宣言したのである。

メジャーリーガーの平均年収は220万ドルといわれる。それでも、賞金で好物のボローニャサンドイッチにありつくのには、たまらない魅力があるようだ。ライトがついてかばんがでてくると、賞金に目が眩んだ選手たちは、我先にと荷物置き場に群がる。

小型の緑のサムソナイト・スーツケースが最初にでてくる。細かい漢字で書かれたラベルがみえる。そう、右翼手イチロー・スズキのものだ。

「ウィーザード！」一同はいった。「ウィズーアード」、「ウィズー」そのバッグを手にして、チームメートにとっての小柄な魔法使いは、静かにペリーに歩み寄り、賞金をつかむと、背が高く大きなチームメートに囲まれた自分の場所にすばやく戻った。うれしそうな表情や、喜びの言葉はない。「やつは静かでクールなんだ」とペリーは笑った。「勝算があるときはいつもね」。

スズキが賭けに勝ったのはすこしも驚きではない。というのも、彼

の最初のメジャーシーズンが四分の一を終えた今、彼が何をやっても誰も驚かなくなったからである。スズキは4月のアメリカン・リーグ月間MVPを受賞した。だから？スズキが単打、二塁打、三塁打を1試合で打った。だから？スズキが右翼フェンスからホームベースに直接返球した。だから？ジョージ・シスラー<sup>75)</sup>のもつシーズン257安打という81年前の記録を破りそうだ。だから？スズキがサダメ・フセインを捕まえた？エイズを治す薬を発見した？マイク・タイソンをノックアウトした？だとしても、だれも驚かないだろう<sup>76)</sup>。

このようなイチロー評ができあがるまでに、彼の走塁や守備面での美技が少なからぬ役割を果たしたことは間違いない。しかし、アメリカファンをもっとも魅了したのは、いうまでもなく打撃面でみせた実力である。

シーズン開始まで優勢だった力不足という印象を、イチローは直ちに吹き払った。第2戦こそノーヒットに終わったが、第3戦から20日のエンゼルス戦まで15試合連続安打、1試合はさんで5月18日のヤンキース戦まで23試合連続安打を重ね、「軽打者（スラップヒッター）」<sup>77)</sup>としての持ち味を惜しみなく發揮した。23試合連続安打記録が作られつつあるころ、ESPNで取り上げられるイチロー報道には、「センセーション」という枕詞がつくようになった<sup>78)</sup>。

結局4月、5月に行われた52試合中、ノーヒットはわずか4試合のみだった。コンスタントなバッティングによって、4月の通算打率は.336(116打数39安打)、5月は.379(124打数47安打)。いずれも極めて高いバッティング・アベレージである。その後、6月21日には5打数3安打を打って打率を.353にあげ、ボストン・レッドソックスのマニー・ラミレス<sup>79)</sup>を抜いて打率1位にたった。以後、7月に一時的スランプに陥ったとはいえ、イチローの打棒はほとんど休むことを知らなかった。そしてシーズン終了時、出場試合数157、692打数242安打（打率.350）の記録でリーディングヒッターの栄冠に輝いたのである。

シーズン開始からしばらく、イチローの打撃にむけられた唯一の批判は、左投手に弱いとするものだった。当初左投手に抑えられたことは、打撃成績にも表れた。ノーヒットに終わった4月3日の第2戦は、アスレチックスの左投手バー・ジート<sup>80)</sup>に3の0、4月中のもう一つのノーヒット試合であった4月21日の対エンゼルス戦でも、やはり左投手のジャロッド・ワッシュバーン<sup>81)</sup>に3の0だった。

しかしシーズンを通してみると、左投手がイチローの弱点とはいえないことがわかる。2001年シーズンの対左投手の打率は.318であった<sup>82)</sup>。右投手に対する打率と比べると見劣りするものの、それでも十分合格点を与えることのできる数字である。また、たとえ2001年に左投手が弱点だったとしても、2002年シーズンにそれを克服したことは明らかである。8月17日現在、イチローの左投手に対する打率は4割近くに達し、左打者の対左投手打率としてメジャーでナンバーワンの位置を占めている。

### 3. 「メジャーリーガー・イチロー」の誕生

シーズン開幕からの2ヶ月間に、イチローはシーズン前の懷疑や消極論を、実力で見事跳ね返した。では、イチロー旋風が吹き荒れる中、アメリカでのイチロー評はどのように変化したのであろうか。この点を、主要な新聞や雑誌を題材として検討することが本節のねらいである。題材としたのは、『スポーティング・ニュース』誌(SN)、『スポーツ・イラストレイティッド』誌(SI)、『USA トゥディ』紙(USAT)、『ニューヨーク・タイムズ』紙(NYT)、『シアトル・タイムズ』紙(ST)の5つである。この選定は、最大手スポーツ雑誌(SNとSI)、最大手全国紙(USATとNYT)、地元有力紙(ST)という基準に基づくものである<sup>83)</sup>。

#### (1) 『スポーティング・ニュース』誌(SN)

SNによる報道は、2000年11月20日のラリー・ラルーによる、マリナー

ズとの契約成立に関する記事に始まる<sup>84)</sup>。ラルーは続いて12月4日にイチローの紹介記事を書いている。その中で日本のシーズンの短さへの言及をさりげなく込め、内角の速球と外角の変化球に弱いのではないかとの批判を行っている<sup>85)</sup>。

2001年3月19日には、第2の記者マイケル・ニズレーによる記事が掲載される<sup>86)</sup>。ニズレーは「イチロー」という呼称を採用し、以降誌の方針として定着させたようである。この方針は、イチローの意志を尊重し、彼の入団を歓迎する姿勢を反映するものと見ることができる。またこの採用は、後にみるSTに次いで早い時期であることに注目したい。

この記事でニズレーは、イチローの日本球界での輝かしい記録を書き並べる一方で、手厳しい批判者の存在に注意を向けている。その一人は、アトランタ・ブレーブスの打撃コーチで、サンディエゴ・パドレスでトニー・グワイン<sup>87)</sup>を9年間指導した経験を有するマーブ・レッテンマンドである。彼は、「イチローとグワインの比較など話にならない、少なくとも2001年のシーズンにグワインのような数字をイチローが残すことは有り得ない」と述べたという。

5月7日には、ラジオ番組「スポーティングニュース・ラジオ」のホスト、ジェイ・マリオッティによる記事が掲載される。マリオッティは、「イチロー」とファーストネームで呼ばれる特別扱いに承服できない読者をなだめようとし、様々な障壁や人種差別的言動を克服してメジャーの一員となったイチローへ歓迎のメッセージを送る<sup>88)</sup>。

マリオッティのエールに促されるかのように5月21日、ニズレーとマット・クロスマンがイチロー特集を組む。その中で二人は、ビネラやジェイミー・モイヤー<sup>89)</sup>の賞賛の弁などに依拠しながらイチローの打撃センスを絶賛し、イチローが「スーパースター」であると宣言している。SNによる公式な認知が確立したことを示唆する内容である<sup>90)</sup>。

## (2) 『スポーツ・イラスト레이ティッド』誌 (SI)

SIによるイチロー報道は他紙よりも古く、1999年早春、イチローがピオリアキャンプを訪問した時期に始まる。1999年3月8日号でケビン・クックとマーク・ムラヴィックは、厳しい目でイチローを批評する<sup>91)</sup>。ケン・グリフィ・ジュニア<sup>92)</sup>との比較を試みるが、コメントは冷たい。二人の共通点は人気、守備力、そして「威張った態度 (swagger)」のみで、決定的な相違点はイチローのパワー不足にあるとする。

イチローのマリナーズ入団決定後、第3の記者マイケル・ファーバーは12月4日に記事を書いている<sup>93)</sup>。ここでは、日本のイチローブームに焦点をあて、イチローの成功を疑わない様をややシニカルに描写している。バッターボックスで投手に向かってバットを高々と掲げる動作を、映画『スターウォーズ』のルーク・スカイウォーカーが決闘に際してライト・セイバーを構える様子に準えている。そこに愚弄とはいえないまでも、ある種の諧謔を覚える読者は少なくないはずである。

3月26日のトム・ベルデウッチによるマリナーズの戦力予想は、イチローに焦点をあてたものではない<sup>94)</sup>。しかしキャプションの一つで「日本から来たスズキは外野手および走者として優れているが、マリナーズが必要とする打席でのパワーが不足している」と断定している。またもう一つのキャプションは、「ジョン・オルルッド<sup>95)</sup>とエドガー・マルチネス<sup>96)</sup>には首位打者をとる可能性がある。イチロー・スズキは、ある程度の技術と日本での7年連続首位打者という記録を保持するとはいえ、スプリング・キャンプでメジャー投手の速球にバットを叩き落とされてしまった。彼は内角が打てない」と決め付けている。

開幕後、最初の記事は4月9日号に掲載されたムラヴィックとアルバート・キムによるもので、主たる関心は任天堂にバックアップされたマリナーズの財力に注がれている<sup>97)</sup>。イチロー獲得のためにオリックス球團に支払った移籍金とイチローへの報酬の合計が、ミネソタ・ツインズ全選手の報酬総額よりも270万ドル少ないだけであることに注意を促す。イチロー

獲得にドルを注ぎ込み過ぎであると暗に諭しているようでもある。この記事は比較的簡潔で、イチローの技術や実力についての直接的な言及はない。

4月23日号では6番目の記者マーク・ベッセルがイチローと新庄を取り上げ、両者の実力を比較している<sup>98)</sup>。SIはこの号のカバーにイチローを掲載すべく打診したが、イチローはこれを辞退した。しかし“Rising Sons”という得意の語呂合わせ<sup>99)</sup>をタイトルに挿入した本文では、イチローに対する批判的コメントはみられない。むしろ称えているといつてもよい。打撃比較では、イチローには技術があるが、新庄はぶんぶん振り回すだけとして、イチローに軍配を上げている。4月6日の初ホーマーや「ザ・スロー」などに言及し、どちらも高く評価している。この時点までにイチロー評が安定してきたことを思わせる内容である。

ジェフ・パールマンが執筆する5月28日号では、SIで初めて、呼称として「イチロー」を受け入れる<sup>100)</sup>。また4月23日号は新庄を含む他のアジア系選手にも注意を向けているが、この記事はイチローのみを主役としている。これら二つの理由から、SIもこの時期にイチローに正式な認知を与えたといってよいであろう。総じて、パールマンの筆にはイチローに対する敬意が感じられる。

### (3) 『USA トゥディ』紙 (USAT)

SI同様、USATによる報道もイチローがピオリアキャンプに訪れた時期にまでさかのぼる。1999年2月23日、ロッド・ビートン記者は、「スズキ」とグリフィの比較で、イチローのスピードを称えるモイヤーを引用する<sup>101)</sup>。曰く、「やつは俺が見た野球選手で一番速い。やつに比べればグリフィは止まっているようなものだ。」しかし話題はその後、ロジャー・クレメンス<sup>102)</sup>のトレードに移ってしまう。イチローに本腰を入れた記事とはいえない内容である。

イチローの入札争いの時期にも、ギャリー・グレイヴズ<sup>103)</sup>やビートン<sup>104)</sup>による記事が掲載されるが、扱いは断片的にすぎない。2001年2月

12日にメル・アントネンは、メジャー全球団の状況を解説し、マリナーズにも触れるが、イチローの扱いは小さいままである<sup>105)</sup>。

2月21日のチャック・ジョンソンによる記事が、大きくイチローを取り上げた最初のものといえるだろう<sup>106)</sup>。ここでジョンソンは「スズキ」を使用し、アメリカのファンが「イチロー」を使うことになるかは彼の実力次第であるとする。イチローの実力を査定するために引用するピネラら関係者のコメントは頼もしいが、記者自身の目は厳しい。パワーとスタミナの不足が、最大の懸念事項であると指摘する。

シーズン開始後しばらく、短く単発的な記事が続く。4月25日、パトリック・マクマホンは「スズキ」を用いて、イチローに対する差別行為を告発している<sup>107)</sup>。オークランドでは氷や25セント硬貨をぶつけられ、「日本に帰れ」という罵声を浴びたという。5月14日、アントネンは「スズキ」を用いているが、イチローの活躍を正面から見据えた最初の記事を書く<sup>108)</sup>。ここまで37試合中35試合で安打を打っていることを指摘し、このペースでいくとシーズン中153試合でヒットを稼ぐだろうという大胆な見通しを立てている。但し描写は機械的で、きわめて短い。

5月21日、グレッグ・ベックはUSATによるイチロー承認宣言と見なすのにふさわしい記事を書く<sup>109)</sup>。呼称は「スズキ」を用いているものの、セイフコ球場では「イチロー」と呼ばれることを紹介し、「タイガー、ペレ、マドンナ、マイケル」<sup>110)</sup>に並ぶ存在であるとする。またイチローは、マリナーズがこれまでに32勝11敗という快進撃を果たし得た最大の原因であるとし、マリナーズを去っていったランディ・ジョンソン<sup>111)</sup>、グリフォン、アレックス・ロドリゲス<sup>112)</sup>ら超一流選手の穴を十二分に埋めたと論じている。

5月22日、ハル・ボッドレーはイチローをルーキー（新人）と見なすことに異を唱える<sup>113)</sup>。これはこれまで巷でくすぶっていた議論を公にした、最初の記事の一つである。この主張は、後に新人王選考のための審議に一石を投じることになる。7月3日にはビートンが、イチローがオールスター

一選考で最多得票を達成したことを報じるが、ここでも「スズキ」を通している<sup>114)</sup>。7月11日、ジョン・サラセーノによる、オールスター戦の報道が、USATで最初に「イチロー」を採用した記事である<sup>115)</sup>。しかし同日に掲載されたアントネンの記事は「スズキ」に固執している<sup>116)</sup>。USATはファーストネーム呼称に最も遅くまで抵抗したといえる。

#### (4) 『ニューヨーク・タイムズ』紙 (NYT)

NYTによるもっとも早期のイチロー関連記事は、2000年11月2日に掲載される<sup>117)</sup>。記者マレー・チャス (Murray Chass) はその中で、オリックスがイチロー放出に同意するまでの経緯を紹介した後、イチローの才能と可能性について語る多くの人物を引用している。その中には、代理人アタナシオ、メッツのジェネラル・マネジャーであるステイプ・フィリップス、マリナーズ打撃コーチでかつて日本でプレーしたことのあるジェシー・バーフィルドなどが含まれる。それぞれの、イチローに対する高い評価を列挙するが、記者自身の意見は述べていない。

続く二つもチャスによるもので、イチローの入団交渉に関する記事である<sup>118)</sup>。入札の結果マリナーズは、ドジャーズ、メッツ、エンゼルス、インディアンズ等を抑えて交渉する権利を競り落とした<sup>119)</sup>。ヤンキーズの名はそこにはなかった。チャスは、ヤンキーズがイチロー獲得を最終的に見合せた理由を「他球団が見た才能をヤンキーズは見なかった」からであると述べ、その決定を弁護しようとする。所詮イチローは、「平均以上の肩、平均以上の守備力、平均以上の走力」を有するに過ぎない。要するに肩、守備力、走力において「並以上」程度であり、ヤンキーズが大金を費やすほどの人材ではない、と主張したいかのようである。

スプリングキャンプ最中の2001年3月3日、やはりチャスがイチロー関連の記事を書いている<sup>120)</sup>。話題は、イチローがメジャーリーグ史上初めてファーストネームのみで呼ばれる選手となることについてである。「サミー」や「ペドロ」のようにファーストネームの愛称が定着した選手はい

る。前者はシカゴ・カブスのサミー・ソーサ<sup>121)</sup>、後者はボストン・レッドソックスのペドロ・マルティネス<sup>122)</sup>である。その彼らでさえ、紙面や球場のネームボードに掲示されるのはラストネームである。チャスは疑問を投げかける、どうしてイチローの特別扱いが許されるのかと。

シーズン開始後、イチローの快進撃たけなわの2001年4月22日の記事も、チャスが書いている<sup>123)</sup>。アスレチックスのジェネラルマネジャーであるビリー・ビーンが「スズキ」と呼ぶのを引用し、それを根拠とするかのように、以後一貫して「スズキ」を使用している。この記事の主題は、マリナーズの好調さの分析である。イチローの貢献を認めつつ、「その理由は、イチロー以外にもある」とし、先発陣の好投、それ以上に強力なリリーフ陣、固い守備を挙げている。チャスはイチローの実力を素直に認めることをあくまでも避けているかのようである。彼はこの記事の後、しばらくイチロー報道から遠ざかることになる。

二日後の4月24日、担当がサム・ヴァーホヴェックに代わる<sup>124)</sup>。彼の使用する呼称も「スズキ」である。この記事の焦点は日本人やアジア系アメリカ人の熱狂ぶりに置かれている。もちろんイチローへの言及もある。SI誌のカバー写真掲載依頼をイチローが断った件に触れ、謙虚さの現われとして好意を示している。しかし、イチローの容貌を描写する際、「やせ衰えた、不気味な(gaunt-looking)」という否定的なニュアンスを伴う形容詞を使用している。また、「スズキに話をするためだけに1,300万ドルも支払った」という表現などには、イチローを「高価な買物」とみなす批判的な態度が感じられる。

続く4月25日の記事では、第3の記者ジョージ・ヴェクシーが、ヤンキーズとの初対戦を解説する<sup>125)</sup>。ヴェクシーは、ヤンキース球場のアナウンス担当者ポブ・シェパードが「イチロー」の発音を練習したという話を紹介した後、遂にこれを呼称として採用する。試合後のインタビューの様子、イチローの今後などについて筆を揮っている。この記事では、イチローの成功を率直に認める姿勢が前面に出ている。

5月17日、第4の記者ハワード・フレンチも「イチロー」を用い、日本の事情を紹介する<sup>126)</sup>。メジャーリーグ・ブームを日本の球団関係者が脅威と見なす様子が報告される。5月18日には、第5の記者ハーヴェイ・アラトンが、「スズキ」を用いて、ヤンキース戦で23試合連続安打を樹立したことを伝える<sup>127)</sup>。しかし主な関心はマリナーズのジェネラル・マネジャーのパット・ギリックにあり、彼のマリナーズ経営戦略を称えている。

NYTによる報道における転換点は、5月21日、第6の記者バスター・オールニーによってもたらされたといえよう<sup>128)</sup>。オールニーは一貫して「イチロー」を用い、その優れた運動能力と野球センスの良さを絶賛する。マイク・ムッシーナ<sup>129)</sup>の低めのスローカーブをヒットにした動体視力を称え、イチローを「優れた選手」ではなく「スーパースター」であると断言する。イチローの打法を、球史に残る好打者であるエドガー・マルチネスやウエイド・ボッグズ<sup>130)</sup>に比較した後、並の打者とイチローの違いは、「毎朝7時のバスにぎりぎりで駆け込む乗客と、10分前にバス停に着いてバスが来るのを待つ乗客の違いである」という巧みな比喩で説明する<sup>131)</sup>。この記事は、批判的なコメントや冷淡さを感じさせる表現を一切使用せず、確たる論調で終始イチローを賞賛している。

#### (5) 『シアトル・タイムズ』紙 (ST)

地元有力紙であるSTは、マリナーズ球団が大枚を投じて獲得したイチローに当初から大きな関心を寄せていた。しかし、開幕前のイチロー評価は概に好意的とはいえないものがある。イチローが「若いトニー・ゲウインだと評された」事例<sup>132)</sup>などを紹介して、その才能に期待していると思わせる反面、オープン戦で「右翼方向に引っ張るバッティングは皆無」として疑念を隠さない<sup>133)</sup>。但し、11月30日の時点で、他紙に先んじて「スズキ」ではなく、「イチロー」という呼称の採用に踏み切っているが、この姿勢は、イチローの意思を尊重し、彼の入団を歓迎する姿勢を反映するものとみることができる。

それでも、キャンプが終わった時点でも疑惑は晴れなかったようである。「結局のところ、イチローは投球にあわせてスイングして、軽く当てるスタイルの打者なのだ」として、あからさまな失望すら表明しているのである<sup>134)</sup>。

華々しいデビュー後、巧打を見せつけた最初の数週間でさえ、賛辞を惜しまない反面、最終的判断を保留していることを窺わせる姿勢を散見することができる。その一例に4月19日のスティーブ・ケリーによるものがある<sup>135)</sup>。18日の試合で13試合連続安打というチーム新人記録に並び、打率は.364（66打数24安打）という高位置につけていた。「イチローはすでに本物であることが明らかになった」という文言で締めくくっている。しかし同じ記事で、「あいつはイチロー・ロドリゲスではない」という皮肉をまじえたサインボードが観客席に掲げられたことに言及し、批判者が存在することに注意を喚起するのを忘れない。「アレックス・ロドリゲスには及ばない」という評価を、ここで間接的に伝達していると読むこともできる。イチローの好スタートを祝福しつつ、その前途に対する楽観を許さない態度を感得できる。

同じような姿勢は、ラリー・ストーンによる5月20日の記事にも看取できる<sup>136)</sup>。それは、「大リーグがいきなりイチローの独壇場となってしまった」という書き出しで始まる。だがストーンは、終始樂觀を戒めようとする。「新人王獲得が確実視されているイチローであるが、MVP（リーグ最優秀選手賞）の同時受賞の可能性もあるというのだろうか」、「それにしても、シーズンを四分の一過ぎた今の時点で、イチローより活躍した選手は他にいないのだろうか」、というように質問形式の呼びかけを用いて、疑惑が払拭されていないことを、読者に想起させようとする。読み手によつては、この記事をイチローブームに水を差すものと受けとめるだろう。

しかし5月22日、遂にSIの「謝罪宣言」として広く知られるようになる記事が発表される。シャーウィンによるこの記事の書き出しこうである。

そもそも懺悔しなければならない。この日本から来た未知の選手、この「たたき打ち」タイプの細身の打者を信用していたアメリカ人が、いったいどれだけいただろう。そのうえ、これほどの短期間でアメリカの野球界に衝撃を与える選手になることを、いったい誰が予想しただろう。

イチローの快進撃を予想できなかったのは、ことによるとメジャーリーグのおごりかもしれない<sup>137)</sup>。

シャーウィンは著書の中で、「アメリカ人スポーツ記者、イチローをばかにしていたと謝罪」という見出しを載せた日本の出版物に言及し、その記者が彼自身であったことを打ち明けている。こうした報道に対し、シャーウィンは反論を加えているが、イチローの才能を見抜けなかつたこと、そして見抜けなかつたのは他のほとんどのアメリカジャーナリストについても同様であったことを、素直に認めている<sup>138)</sup>。その点で、たとえ「謝罪」を意図しなかつたにせよ、この記事はそれまでと大きく論調が異なつている。イチローに対するSTの評価の、大きな転換点を記したものであるといえよう。

以上、5つの誌/紙面にみられたイチロー報道とその論調をたどってみたわけであるが、それぞれに固有の特徴を指摘することが可能である。

まず各誌/紙は異なる頻度で異なる量の記事を掲載している。最多はSTの19回、次いでNYTとUSATの14回、そしてSIとSNの6回である<sup>139)</sup>。STは平均して記事が長く、USATは一度の例外（2001年5月21日）を除いて、簡潔で事実報告的である。イチロー報道を開始する時期にもばらつきがみられる。ST、SI、USATは1999年のピオリアキャンプ時、NYTとSNは2000年秋の入団交渉時である。報道を担当する記者の数も、各誌/紙まちまちである。最多はSI、USAT、STで7名、NYTは6名、SNは3

名である。

こうした一連の特徴を参照しながら、上にまとめた論調を目安として、イチローに対する関心の度合によって5つの誌/紙を序列化することが可能である。総合的にみると、USAT, NYT, SI, SN, ST の順で関心が高まり、好意の度合が増すといえよう。またこれは、後にみるように、呼称として「スズキ」と「イチロー」のいずれを用いるかという問題と深く関わっている。

5つの誌/紙による報道の分析は、このような多様性にもかかわらず、いくつかの共通点をも明らかにする。それは、次の四点に整理することが可能である。

第一に各誌/紙に共通したのは、開幕前の論調に潜んだ、イチローの可能性に対する低い評価である。地元紙であるSTは、最も早期から最も強い関心を示し、多くの紙面を割いた。他に先んじて「イチロー」という呼称を受け入れた点でも注目に値する。しかしSTのスタッフリポーターにも、他誌/紙記者同様、メジャーで通用しないのではとの疑念がペナントレース開幕まで、否、開幕後もしばらくつきまとった。NYTではそれが、イチロー獲得を見合わせたヤンキーズを正当化するために、堂々と表明された。USATとSNでは扱いそのものが小さく断片的だった。SIの扱いはそれよりは大きかった。しかしこれら三誌/紙とも、欠点や弱点を数え上げることに余念がなかった。

第二に、開幕前の批判にもかかわらず、ひとたび開幕してイチローが本領を發揮すると、タイミングに多少のズレこそありさえすれば、5月末までに承認と賞賛へと立場を逆転させた。SIの場合、シャーウィンによる5月22日の記事が、本人の意図したものでないにせよ、「謝罪宣言」として広く受けとめられた。NYT, USAT, SNではいずれも、5月21日の記事をそのように位置付けることが可能である。SIでは5月28日号の特集がこれにあたる。こうしてみると、異なる目的、立場、読者層を有するにもかかわらず、これらの5つはほぼ同じ時期に論調を転換し、肯定的なイチ

ロー評を確定したことになる。

第三に、イチロー評を転換する際の報道戦略上の共通点を指摘できる。それは単一の記者が立場を翻すというよりは、報道担当を変更するというかたちで展開した。ST のように「謝罪宣言」と見なし得る記事が書かれることはむしろ例外的で、他四誌/紙はいずれも、それまでイチロー担当ではなかった記者によって期を画す記事が書かれている。SN ではクロスマンが、SI ではパールマンが、USAT ではベックが、NYT ではオールニーがその役を担ったことになる。

第四に、イチロー評の転換を象徴する変化として、彼の呼称が「スズキ」から「イチロー」へとシフトしたことが挙げられる。ファーストネームによって呼ばれたいというイチローの意志がますますあり、それを承認したマリナーズ球団の決定があった。このような経緯を踏まえて、いかなる呼称を採用するかは、各誌/紙の意見が分かれる一つの大きなポイントとなった。地元紙 ST は、球団の決定とほぼ時を同じくして採用に踏み切った。しかし記名にファーストネームを用いることは、大手メディアにとってほとんど前例のない行為だった。他誌/誌は抵抗を覚え、不快感を表明した。当初四誌/紙は「スズキ」を用いていたが、まず SN が2001年3月19日に「イチロー」を受け入れた。次いで NYT が4月25日に、SI が5月28日に続いた。USAT は最後まで抵抗し、7月のオールスター時点でも、「イチロー」と「スズキ」を併用した<sup>140)</sup>。

こうしたスタンスのばらつきは、イチローに対する敬意の度合や評価の差を示唆するものである。しかし注目すべきは、このようなばらつきにもかかわらず、5つのうちの4つまでが「イチロー」を採用するに至ったという事実である。これは、成果をあげたことによってイチローが、まさしく名実共にアメリカ球界に、そしてアメリカ社会に認められ、受け入れられたことを意味する。「メジャーリーガー・イチロー」は、かくして誕生したのである。

イチローを名実ともに承認した時期が、5月下旬という線で概ね一致し

たのはいかなる理由によるのであろうか。ここでは、大きな衝撃を与えた一つのプレイに注目しておきたい。5月20日、ヤンキーズ三連戦の第三戦でのことである。イチローは第二イニング、先発投手クレメンスに対する二度目の打席に立っていた。第1打席はセカンドゴロに打ち取られていた。クレメンスは豪速球と鋭く曲がるスライダーを武器とする、押すに押されぬヤンキーズのエースである。この打席でイチローは、カウント2-2から真ん中低めのスライダーをレフト線へ巧打し、得意の足で二塁を落とし入れた。

メジャーの頂点を極めた大男の投じる剛球を、タイミングを狂わせられないように十分にため、優れた動体視力を駆使して正確にミートし、快足を発揮して二塁打を稼いだこの小兵を、アメリカのベースボールファンはどのように見たのだろうか。このプレイは、「剛のベースボール」を制した「柔の野球」という図式を表していた点で、2001年シーズンのイチローを集約するものだった。この一騎打ちが、残存したであろう最後の疑念を一掃する上で大きな貢献をなしたことは間違いない。クレメンスからの二塁打はそれだけの衝撃と印象を、満員の観衆と全米の視聴者に与え得るものだったのである。

### おわりに

2001年シーズン開幕前のイチロー評は、最も彼に近く、その能力を熟知したごく一部の専門家を除いて、きわめてつつましいものだった。日米球界の監督、選手、スカウトら球団関係者、ジャーナリスト、他の専門家等に概ね共通していた線は、好守・好走は期待できるが、打撃力はせいぜい並の上、数字をあげるなら打率2割8分程度、よくて3割、そんなものだった。

だがイチローは、開幕戦から攻守走に卓越した能力を発揮した。彼はチーム開幕ダッシュの原動力となった。シーズン最初の2ヶ月間に、次から

次へと周囲の疑惑や批判を払拭し、5月末には最も頑固な懷疑者をさえ説得するに至った。その後も、それまでを凌ぐようなファインプレーの連続で全米を驚異と感動の渦に巻き込み、メジャー史上希に見る高い勝率で球団をリーグ優勝へと導いた。また、首位打者、盗塁王などの個人賞に輝き、新人王と最優秀選手二冠を獲得した。これらについては、他ならぬ私たち自身が証人である<sup>141)</sup>。

イチローの活躍は、私たち日本人の好奇心を煽り立て、彼個人やメジャーリーグ・ベースボールを越えて、アメリカ社会の秩序と構造への注意を促してきた。実際、イチローに対する私たちのコメントには、個人に対する評価にとどまらず、その背後にあるアメリカ社会に言及するものが非常に多い。以下に引用する投稿文は、その好例である。

証言1：野球を職業とし、バット一本、腕一本に夢をかけて海を渡った彼らの勇気をたたえ、だれもが惜しみない声援を送っている。ある週刊誌で野茂が「大リーグはすべて平等で差別がない」と言っているのを読んで、日本のプロ野球を駄目にしている原因を考えた<sup>142)</sup>。

証言2：イチロー選手の記録達成に観客は拍手を送った。国籍や人種に関係なく、偉大なプレーヤーに対する称賛の拍手だった<sup>143)</sup>。

証言3：大リーグの偉大な記録が、日本から来たそれまであまり知られていなかったイチローに破られても、アメリカ人の目には関係なかった。アメリカ人はイチローを応援し、イチローはヒットを打ち、新しい記録だけでなく、野球にとっての新しい意味を作った。人間は人間。スポーツはスポーツ。イチローの肌の色は、アメリカでは関係がなかった。プライドが高すぎた日本は、野球の内容まで深く見られず、ただ外国人が成功するのがこわかったのではないだろうか<sup>144)</sup>。

証言4：大リーグ観衆のイチローコールやイチローの打法をまねるちびっ子選手たち。人種や民族を問わずに、良い選手は素直に受け入れる米国野球ファンに、「ありがとう」と言いたい<sup>145)</sup>。

証言5：かつて日本では外国人にタイトルをとらせるな、ということが野球や相撲界にあったと思う。実力があれば国籍、人種に関係なく公平に評価されるスポーツ。選手と観客が一体になって楽しむ大リーグ、私たちもそうした点を見習うべきであろう<sup>146)</sup>。

これらの証言は、賞賛の眼差しがイチローにとどまることなく、アメリカ球界を経てアメリカ社会へ到達しているという点で共通している。各証言には、イチロー個人の技術的な卓越を賞賛すると同時に、「すべて平等で差別がない」、「国籍や人種に関係なく」、「イチローの肌の色は、アメリカでは関係がなかった」、「人種や民族を問わず」、「実力があれば国籍、人種に関係なく公平に評価される」といった表現にみられるように、アメリカ社会の秩序と構造のありかたを称揚する態度を窺うことができる。換言するならば、イチローの個人的有能さとアメリカ社会の秩序・構造上の特長が連動し共鳴しあった結果、「メジャーリーガー・イチロー」が誕生したとする認識が、そこには存在する。

このような認識は、一見する限りではもっとものようである。殊に、イチローの個人的能力の優越について異論を差し挟むのは難しい。幾多の書籍が称えるように、イチローが日本球界史上最強の打者であることは論をまたない。しかし、アメリカ社会のあり方については、もっと慎重な検討が必要である。アメリカのスポーツ界が人種や民族の異なる人々をこれまでいかに処遇してきたか、現在いかに処遇しているのかに関して、イチローの事例を取り上げて安易な礼賛を導く傾向については、むしろ警鐘を鳴らすべきである。すくなくともそれは、体系的で綿密な検証が要求されるテーマであるといえる。

この点についてアメリカの学界は近年、多くの研究を蓄積し、解釈を構築してきた。しかし日本の学界においてその努力は甚だ不十分であることは既に指摘した通りである<sup>147)</sup>。我が国においてアメリカスポーツの歴史と現状を人種・民族の視点から捉え直す努力は今始まったばかりといってもよい。

注1でも述べたように、イチロー旋風はアメリカ社会における偏見やステレオタイプの持続を検証するための、有効な題材を提供する。その意味でこの現象は、単なるベースボールでの驚異ではなく、アメリカ研究者にとって極めて興味深い、歴史/社会学的研究への契機となる豊かな可能性を有しているのである。

### 注

- 1) 本稿の構想は、明石紀雄監修『21世紀アメリカ社会を知るための67章』明石書店 2002年、の一章として執筆した小稿「イチロー旋風と人種偏見—日本人大リーガーの活躍はアジア系ステレオタイプの反証となったか」に端を発している。この小稿では、イチロー旋風がアジア系ステレオタイプに反証を加えるよりむしろ、それを補強するのではないかという示唆を行った。本稿では、このような主張を本格的に展開するための準備となる考察を試みる。本稿を通して、鈴木一朗の活躍によって彼に対する評価がいかに変わったのかを明らかにしたい。そうすることで、人種・民族的偏見やステレオタイプのように長期にわたって、持続的に人々の意識や行動を左右するものの存在を浮かび上がらせることができると考えるからである。
- 2) 本稿は、日本のメディア一般の慣行に習って、鈴木一朗を「イチロー」と呼ぶものとする。本稿で言及する人物は、初出の際はフルネーム、以後は姓のみとする。
- 3) イチローの成績は、試合毎に更新される次のサイトから入手できる。「Ichiro Today 2002」[<http://macamp.site.ne.jp/shaka/ichiro/>]
- 4) 1988年ドラフトで近鉄バファローズ入団、1994年秋ロサンゼルス・ドジャーズに移籍。その後いくつかの球団を渡り歩くが、今シーズンドジャーズに復帰。9月9日時点での成績は13勝6敗。メジャー8年間の通算成績は95勝77敗である。
- 5) 1989年ドラフトで大洋ホエールズ（現横浜ベイスターズ）入団、1999年秋シアトル・マリナーズに移籍。ストッパーとして一昨年、昨年、今年と大車輪の活躍。9月9日時点での成績は3勝5敗34セーブ。メジャー3年間の通算成績は5勝14敗116セーブである。
- 6) 1964年、20歳で南海ホークスからメジャーリーグへ野球留学した村上は通算で5勝1敗9セーブという記録を残した。
- 7) イチローと、本文で言及する4名（野茂、佐々木、村上、長谷川）の他に鈴木誠、柏田

- 貴史, 伊良部秀輝, 吉井理人, 木田優夫, 大家友和, 小宮山悟, 田口壯, 石井一久, 野村空生らがいる。
- 8) 1989年ドラフトでオリックス・ブルーウェーブ入団。1996年金銭トレードでアナハイム・エンゼルズに移籍。2002年マリナーズに移籍。今年度はこれまで6勝1敗1セーブ。メジャー6年間の通算成績は36勝28敗17セーブ。
  - 9) 1989年ドラフトで阪神タイガース入団。2000年冬ニューヨーク・メッツに移籍。2001年シーズンはメッツで、2002年シーズンはサンフランシスコ・ジャイアンツでプレーする。イチローのような好成績はあげていないが、独特的な個性とパフォーマンスで人気を集めている。
  - 10) マリナーズとブルーウェーブ間で交換プログラムを実施し、ブルーウェーブからイチローの他に星野伸之投手、戎信行投手らが参加した。交換プログラム成立の背景には、神戸とシアトルが姉妹都市であるという事情もあった。
  - 11) 石田雄太『イチロー、聖地へ』文藝春秋 2002年、17頁や、シアトルタイムズ記者グループ『イチロー・ザ・スーパースター』イースト・プレス 2001年、19頁参照。
  - 12) 『朝日新聞』2001年11月21日夕刊。
  - 13) 角盈男監修『イチロー：“メジャー4割”への挑戦』双葉文庫 2001年、4頁。
  - 14) 奥田秀樹・葛下リョウ『夢の彼方へ—イチローのMLB挑戦、241日の軌跡～』角川書店 2001年、20頁。
  - 15) ポブ・シャーワイン（清水由貴子訳）『ICHIRO：メジャーを震撼させた男』朝日新聞社 2002年、36頁。
  - 16) シアトルタイムズ、165頁。
  - 17) デイヴィッド・シールズ（永井淳/戸田裕之訳）『イチロー USA語録』集英社新書 2001年、96頁や、中谷美佐『アメリカ人がイチローを評価する本当の理由』キルタイムコミュニケーション 2002年、31頁参照。
  - 18) 石田、39頁。
  - 19) 奥田、20頁。
  - 20) ベル・スズカワ「イチローの中にあったメジャー的素養」、角、149頁。
  - 21) 1927年生まれ。現役時代は無名の投手だったが、1976年にドジャーズ監督に就任して以来、有能ぶりが注目を浴びる。監督としての通算1,599勝は歴代14位、チームを2度のワールドシリーズ優勝に導いている。引退後、チーム副社長に就任。
  - 22) イチロー一番記者グループ『イチロー：天才の真実と秘密』ゼニスプランニング 2001年、70頁。
  - 23) 1985年からテキサス・レンジャーズ監督となり、来日して95年のシーズンに千葉ロッテ・マリーンズ監督として2位の成績を残した。その後ニューヨーク・メッツ監督に就任。日本人選手をメジャーに送り込むために多方面で活発に発言している。
  - 24) シアトルタイムズ、26頁。
  - 25) オークランド・アスレチックスのスタープレイヤーとして活躍、2001年シーズンには打率.342（ア・リーグ2位）、ホームラン38本（同7位）、打点120（同8位）を残した。シーズン終了後、7年契約、1億2,000万ドル（157億円）でニューヨーク・ヤンキースへ移

- 籍、今シーズン4番を打っている。
- 26) 奥田、22頁。
- 27) シカゴ・ホワイトソックスの主砲。2001年シーズンは故障に泣いたが、打撃3部門（打率、打点、ホームラン）の安定度はメジャー屈指といわれる。2000年シーズンの成績は、打率.328（ア・リーグ9位）、ホームラン43本（同2位）、打点143（同3位）だった。
- 28) 奥田、23頁、シールズ、44頁。
- 29) シャーウィン、94頁。
- 30) 1960年、カリフォルニア生まれ。88年より東京に在住、スポーツ関係の著書多数。99年より『ザ・デイリー・ヨミウリ』紙でコラムを担当している。
- 31) シールズ、159頁、165頁。
- 32) 奥田、20頁。
- 33) 1935年カナダ生まれ。職業を転々としながら小説を書き、『シューレス・ジョー』でホートン・ミフリン賞を受賞。この小説は映画『フィールド・オブ・ドリームス』の原作となり、日本でも話題を呼んだ。
- 34) W.P.キンセラ（井口優子訳）『マイ・フィールド・オブ・ドリームス：イチローとアメリカの物語』講談社 2002年、1頁、19頁。
- 35) シャーウィン、9頁。
- 36) 同上、11頁。
- 37) ESPNは、ABCが主として所有するスポーツ専門のメディア会社。国内向けテレビ放送ネットワークを6つ、海外向けを2つ運営している。アメリカスポーツ報道に大きな影響力を有している。
- 38) 元シンシナチ・レッズの選手で、引退後スポーツコメンテーターとなる。ピネラが監督としてレッズをワールドチャンピオンに導いた時の主力選手だった。
- 39) シールズ、104頁。
- 40) 1948年生まれ。71年にドラフト外で阪急ブレーブスに入団し、捕手として通算11年間で632試合に出場。通算打率.267、49本塁打、190打点。82年に引退後阪急（現オリックス）や巨人でコーチを務めた。
- 41) 小川勝『イチローは「天才」ではない』角川書店 2002年、19頁。
- 42) 角、118頁。
- 43) イチロー一番記者、3頁。
- 44) スポーツライター。1959年生まれ。スポーツニッポン新聞社で記者として勤務した後、2001年に独立。
- 45) 小川、125頁。
- 46) 1954年生まれ、1983年から88年まで阪神タイガースに所属し、通算で2,208打数743安打、打率.337、202本塁打、486打点という輝かしい記録を残す。85年の球団優勝の立役者となり、85年、86年には2年連続で三冠王となった。
- 47) 1954年生まれ、1983年から92年までの10年間阪急（オリックス）、ダイエー・ホークスに所属。通算成績は4,451打数1,413安打、打率.317、277本塁打、901打点。1984年には外国人初の三冠王となる。

- 48) メジャー通算218本塁打という実績とともに来日。1987年のシーズンにヤクルト・スワローズでプレーする。93試合に出場し、打率.327、31本塁打、73打点。デビュー戦で本塁打を3連発、マスクミは「黒船来襲」、「赤鬼」などと書き立てた。
- 49) これ以降の現役メジャーリーガーのデータは、MLB関連サイト（URL：<http://baseball.espn.go.com/mlb/players?league=mlb>）から入手したもので、2002年9月8日現在とする。マイク・ハンプトンは1972年生まれ。90年ドラフト6位でマリナーズに入団、93年にメジャーデビュー、以後ヒューストン・アストロズ、メッツ、ロッキーズと渡り歩く。99年には自己最多の22勝（4敗）をあげる。今までの通算成績は106勝81敗。
- 50) 奥田、25頁。
- 51) 同上、83頁。
- 52) シャーウィン、80頁。
- 53) 同上、107頁。
- 54) 同上。
- 55) 1976年生まれ。1999年メッツでデビュー、翌年アスレチックスへ移籍。99年から2002年現在までの通算成績は、1,731打数471安打、打率.272、43本塁打、224打点。通算盗塁数は17で決して多くはないが、足は遅くないと言われている。
- 56) 1970年生まれ。1993年ボストン・レッドソックスでデビュー、テキサス・レインジャーズを経て、2000年にマリナーズに移籍、2002年からアナハイム・エンジェルズへ。10年間の通算成績は115勝77敗。
- 57) 1976年生まれ。99年アスレチックスでデビューし、現在に至る。通算成績は1,364打数338安打、打率.248、38本塁打、180打点。
- 58) NHKが放送したイチローの特集番組から筆者が聞き取ったアナウンスを和訳。一部聞き取れない箇所があり、その部分は省略した。以下原文：“Ground ball, base hit, in the right field, and he, through the third, is Terrence Long. And the throw by Ichiro! Beautiful, holy throw by laser-beam strike from Ichiro! And do it! Does he get any better than that? A perfect, perfect, perfect throw by Ichiro. WOW! All I've got to say is WOW!”
- 59) 1969年生まれ。92年にマリナーズでデビューし、その後3球団を渡り歩いた後、2001年にマリナーズに復帰。その年打点王（141打点）を獲得。MVP選考でイチローと鎧を削り、結局3位となる。11年間の通算成績は、5,073打数1,348安打、打率.266、184本塁打、773打点。
- 60) 1972年生まれ。95年にクリーブランド・インディアンズでデビュー。99年マリナーズに移籍。2001年シーズン終了後、交換トレードでジャイアンツへ。8年間の通算成績は、2877打数733安打、打率.255、80本塁打、341打点。
- 61) ピネラ、ブーン、ペル三者のコメントはシャーウィン、135-36頁。
- 62) 同上、136頁。
- 63) 同上、136-37頁。
- 64) 小川、139頁。
- 65) シャーウィン、141頁。
- 66) 1968年生まれ。92年エンゼルスでデビュー、今日に至る。通算成績は4,948打数1,412安打、

- 打率.285, 265本塁打, 883打点。
- 67) 1969年生まれ。95年エンゼルスでデビュー、今日に至る。通算成績は1,436打数403安打、打率.281, 3本塁打, 134打点。
- 68) 奥田, 27頁。
- 69) 1973年生まれ。95年カンザスシティ・ロイヤルズでデビュー、今日に至る。通算成績は2,847打数877安打、打率.308, 120本塁打, 505打点。特に今年度は目覚しい活躍で、ア・リーグの首位打者 (.342) の地位を維持している。
- 70) シャーウィン, 142頁。
- 71) 1964年生まれ。87年ヤンキースでデビュー、翌年マリナーズに移籍し、2001年シーズン終了後同球団を引退。通算成績は5,013打数1,273安打、打率.254, 310本塁打, 965打点。
- 72) シャーウィン, 134頁。
- 73) 1964年生まれ。86年にエンゼルスでデビュー、その後数回転籍し、2000年マリナーズへ。通算成績は5,630打数1,468安打、打率.261, 49本塁打, 557打点。
- 74) 石田, 68頁。
- 75) 1893年生まれ、1973年に死去。1915年にセントルイス・ブラウンズでデビュー。20年に .407で首位打者獲得。この年に記録した1シーズン257安打は今日なお、メジャー記録である。
- 76) Jeff Pearlman, "Big Hit," *Sports Illustrated* 94.22 (May 28, 2001), p.34.
- 77) 「軽打者/スラップヒッター (slap hitter)」とはボールをピシャリとたたく (slap) バッティングで内野ゴロを打ち、足でヒットを稼ぐ打者のこと。イチローは典型的な軽打者と見なされる。
- 78) 奥田, 33頁。
- 79) 1972年生まれ。93年インディアンズでデビュー、2001年レッドソックスに移籍。通算成績は4,369打数1,371安打、打率.314, 303本塁打, 1,015打点。現在のメジャーリーグを代表するバッターの一人で、イチローの好敵手と見られている。
- 80) 1978年生まれ。2000年アスレチックスでデビュー、今日に至る。通算成績は44勝17敗。今シーズンは既に20勝 (5敗) をあげており、メジャーリーグ屈指の左腕投手である。
- 81) 1974年生まれ。98年にエンゼルス入団、今日に至る。通算成績は45勝25敗。今シーズンは17勝 (5敗) と好調で、エンゼルスを引っ張っている。
- 82) シャーウィン, 270頁。
- 83) むろん、本稿が取り上げる新聞・雑誌だけでアメリカ世論の変化を把握できるなどと主張するつもりはない。しかし、これら有力紙/誌の世論への影響力は無視し得ないものがある。これらサンプルの分析は、少なくとも世論変化の動向を推し量る一助となるというのが、本稿の立場である。
- 84) Larry LaRue (「ラルー」という日本語読みは推測), "Seattle," *Sporting News* 224.47 (November 20, 2000), p.47.
- 85) Larry LaRue, "Mariners think Suzuki will jump-start their offense," *Sporting News* 224.49 (December 4, 2000), p.64.
- 86) Michael Knisley (「ニズレー」という日本語読みは推測), "Follow that star!" *Sporting*

- News* 225.12 (March 19, 2001), pp.12-14.
- 87) 1960年生まれ。82年サンディエゴ・パドレスでデビュー、2001年シーズン終了後の引退までパドレスでプレイする。通算成績は9,288打数3,141安打、打率.338、135本塁打、1,138打点。ナ・リーグ首位打者8回、18年連続打率3割以上など、球史に残る実績をあげた。
  - 88) Jay Mariotti, "Welcome, Ichiro," *Sporting News* 225.19 (May 7, 2001), p.6.
  - 89) 1962年生まれ。86年シカゴ・カブスでデビュー、他4球団を経て、96年マリナーズに移籍。通算成績は164勝124敗。
  - 90) Michael Knisley and Matt Crossman, "Fast times," *Sporting News* 225.21 (May 21, 2001), pp.22-25.
  - 91) Kevin Cook and Mark Mravic, "Speedy Suzuki," *Sports Illustrated* 90.10 (March 8, 1999), p.36.
  - 92) 1969年生まれ。89年マリナーズでデビューシ、99年終了後シンシナチ・レッズに移籍するまでマリナーズの主砲として活躍。通算成績は6,880打数2,030安打、打率.295、467本塁打、1,357打点。97、98年には二年連続で56本塁打を記録した。レッズ移籍後は、故障もあり打撃は低迷気味である。
  - 93) Michael Farber, "Rising son," *Sports Illustrated* 93.23 (December 4, 2000), pp.68-73.
  - 94) Tom Verducci, "AL (West) Seattle Marines," *Sports Illustrated* 94.13 (March 26, 2001), pp.118-119.
  - 95) 1968年生まれ。89年にトロント・ブルージェイズでデビュー、メッツを経て2000年からマリナーズで一塁を守る。通算成績は6,393打数1,919安打、打率.300、228本塁打、1,051打点。
  - 96) 1963年生まれ。87年のデビュー以来現在までマリナーズに在籍。通算6,168打数1,962安打、打率.318、271本塁打、1,092打点。
  - 97) Albert Kim and Mark Mravic, "Two ways about it," *Sports Illustrated* 94.15 (April 9, 2001), p.30.
  - 98) Mark Bechtel, "Rising sons," *Sports Illustrated* 94.17 (April 23, 2001), pp.36-41.
  - 99) 同誌2000年12月4月号でファーバーが用いたタイトル "Rising son" を複数にしたもの。日本を意味する "Rising Sun" と「立ち上がる二人の息子 ("Rising Sons")」がかけられている。
  - 100) Pearlman, "Big Hit."
  - 101) Rod Beaton, "Japanese star draws Griffey comparisons," *USA Today* (February 23, 1999), 6C.
  - 102) 1962年生まれ。メジャーを代表する本格的速球派投手。84年レッドソックスでデビュー、ブルージェイズを経て1999年シーズンからヤンキースに所属。通算成績292勝150敗。
  - 103) Gary Graves, "Piniella says Clemens missed out on payback," *USA Today* (October 16, 2000), C4.
  - 104) Rod Beaton, "Mariners will pay \$13M to talk with Japan star," *USA Today* (November 10, 2000), C1.

- 105) Mel Antonen, "Spring scramble for positions stars," *USA Today* (February 12, 2001), C7.
- 106) Chuck Johnson, "Suzuki: Mariners' star import Japanese batting champ is ready to succeed in Seattle," *USA Today* (February 21, 2001), C8.
- 107) Patrick McMahon, "Sailing right along in Seattle Imported Suzuki is Mariner's early season rookie anchor," *USA Today* (April 25, 2001), C3.
- 108) Mel Antonen, "Suzuki falls in step with hit parade," *USA Today* (May 14, 2001), C1.
- 109) Greg Boeck, "Mariners navigate without stars; Seattle sailing with Suzuki, blue-collar crew," *USA Today* (May 21, 2001), C3.
- 110) 呼称「イチロー」を受け入れる際、このような対置はしばしば行われた。いうまでもなく「タイガー」はプロゴルファーのタイガー・ウッズ、ペレは元ブラジル代表サッカー選手、マドンナは歌手、マイケルは元プロバスケットボール選手マイケル・ジョーダンである。
- 111) クレメンスと双璧を成す本格的速球派左腕投手。1963年生まれ。88年モントリオール・エキスピズでデビューし、翌年にマリナーズに移籍。98年ヒューストン・アストロズ、99年アリゾナ・ダイアモンドバックスに移籍。通算220勝106敗。2001年オールスターでは先発投手としてイチローと対戦。イチローはファースト強襲の内野安打を放った。
- 112) 1975年生まれ。94年マリナーズでデビュー、2000年シーズン終了後テキサス・レンジャーズへ移籍。オールラウンドプレーヤーとして知られる。通算4,311打数1,340安打、292本塁打、855打点。特に最近本塁打数が増加する傾向にあり、昨シーズン52本、今シーズンもすでに51本を打っている。メジャーリーグの最高給取りとして引用されることが多い。
- 113) Hal Bodley, "Ump ruling may be appealed. No severance for those who will not return," *USA Today* (May 22, 2001), C4.
- 114) Rod Beaton, "Suzuki nabs first, Ripken 19th All-Star trip," *USA Today* (July 3, 2001), C1.
- 115) Jon Saraceno, "Ichiro-mania knows no bounds," *USA Today* (July 11, 2001), C3.
- 116) Mel Antonen, "Ichiro, Johnson tied by number Battle of '51' is a classic," *USA Today* (July 11, 2001), C4.
- 117) Murray Chass, "Majors Are Scrambling For Japanese Outfielder," *New York Times* (November 2, 2000), D1.
- 118) Murray Chass, "From Japan to New York?" *New York Times* (November 9, 2000), p.11; Murray Chass, "Mariners Gain Rights to Sign Suzuki," *New York Times* (November 10, 2000), D1.
- 119) シャーウィン、23-24頁。
- 120) Murray Chass, "Seattle's Suzuki Ready to Excel By Any Name," *New York Times* (March 3, 2001), p.3.
- 121) 1968年生まれ。メジャーを代表するホームランバッター。1989年シカゴ・ホワイトソックスでデビュー。その後レンジャーズに移籍し、ホワイトソックスに復帰した後、シカゴ・カブズに移る。カブズに移ってからはホームランバッターとして頭角を現し、98年にはセントルイス・カージナルスのマーク・マグワイアとホームラン競争を展開。共に

メジャーリーグ新記録を樹立。ソーサは66本を打って第二位となる。以後4年連続で50本以上を記録、5年目にあたる今シーズンもすでに44本に達している。通算成績は6,955打数1,939安打、打率.279、494本塁打、1,337打点。

- 122) 1971年生まれ。92年ドジャースでデビューし、エキスボズを経てレッドソックスへ、現在に至る。通算成績は149勝63敗。99年には23勝（4敗）をあげている。
- 123) Murray Chass, "Mariners Doing Well Without Rodriguez," *New York Times* (April 22, 2001), p.4.
- 124) Sam Howe Verhovek, "Japan's Baseball Idol Wins Fans in Seattle," *New York Times* (April 24, 2001), A1.
- 125) George Vecsey, "'Ichiro' Sounds Good In Stadium," *New York Times* (April 25, 2001), D1.
- 126) Howard W. French, "Baseball's in a Sad State: Stars Shine (in the U.S.)," *New York Times* (May 17, 2001), A4.
- 127) Harvey Araton, "Baseball Tale: Successful In Seattle," *New York Times* (May 18, 2001), D1.
- 128) Buster Olney, "From Japan, Far From a One-Hit Wonder," *New York Times* (May 21, 2001), p.4.
- 129) 1968年生まれ。91年ボルティモア・オリオールズでデビュー。2001年からヤンキース先発投手陣の一角を占める。通算180勝101敗。コンスタントにシーズン10勝以上を稼ぐ安定度抜群の投手。
- 130) 1958年生まれ。82年レッドソックスでデビューし、99年シーズン終了後引退。「安打製造器」として知られ、83年から89年まで7年連続で200安打以上を記録した。通算成績は9,180打数3,010安打、打率.328、118本塁打、1,014打点。
- 131) "It is the difference between someone who is typically running late to catch the 7 a.m. bus and someone who is always standing at the stop 10 minutes early." バットのヘッドが回らないよう十分にためた状態から鋭く振り出すイチローのバッティングをゆっくりバスを待つ人に、ためられずすぐにヘッドが回ってしまう平均的打者を慌ててバスに乗り込む人に譬えている。このような理解は、小川勝が元オリックス二軍打撃コーチ河村、オリックス・トレーニングコーチ安田昌玄、田村スポーツビジョン研究代表の田村知則らとのインタビューに基づいて解明するイチローのバッティング理論と基本的に通じるものがある。小川、16-122頁参照。
- 132) シアトル・タイムズの記事は、原文を入手できなかったため、前出の翻訳書に頼らざるを得なかった。以下、記者名、記事タイトル、頁数を記すものとする。ブレーン・ニューナム「鈴木の移籍でマリナーズは日本に二度救われる」シアトルタイムズ、26頁。
- 133) ボブ・フィニガン「イチロー、先頭打者への改造」シアトルタイムズ、58頁。
- 134) ボブ・シャーウィン「助っ人日本人選手に対するマリナーズの信頼度」シアトルタイムズ、74頁。
- 135) スティーブ・ケリー「ロドリゲスってだれ？ファンの新しいお気に入りはイチロー」シアトルタイムズ、94頁。
- 136) ラリー・ストーン「敵なしのイチロー。往年の選手たちがライバルか？」シアトルタイムズ、107頁。

- 137) シャーウィン, 12頁。シアトルタイムズ, 120頁にも「イチローの快進撃ははじまったばかり」という題目の下で同じ箇所が翻訳されているが、前者のほうが詳しく訳されているので、そちらに依った。
- 138) シャーウィン, 13-14頁。
- 139) 掲載回数を数える際, ST の場合は前出の翻訳書に頼らざるを得なかった。この書籍が、すべての記事を取り上げている保証はないので、実際の掲載回数はもっと多かった可能性がある。他4誌/紙の場合は、ProQuestというデータベースに "Ichiro" というキーワードを入力することで検索した。したがって実際の掲載回数を正確に把握できたものと考える。
- 140) "Suzuki" から "Ichiro" へのシフトは、むろんゼロサムゲーム的に展開したわけではない。参考までにイチロー評価のターニングポイントとなった記事における二つの名称の使用頻度を記すと次のようになる。前者が "Ichiro" 記載回数、後者が "Suzuki" 記載回数である。SN 5月21日号は35対4、SI 5月28日号は39対13、USAT 5月21日版は8対16、NYT 5月21日版は44対3である。いずれも両者を使用しているが、その頻度から志向を推し量ることができる。SN、SI、NYT 三者が "Ichiro" を支持し、USAT が "Suzuki" に固執しているのは明らかである。
- 141) その他にイチローが達成した記録に、メジャー新人最多安打(242)、リーグ最多単打(192)、メジャー最多安打試合(135)、球団新人連続試合安打(23)、リーグ新人最多打数(692)などがあり、獲得した賞にシルバースラッガー賞、ゴールドクラブ賞などがある。
- 142) 『朝日新聞』 2001年5月15日朝刊
- 143) 『朝日新聞』 2001年10月10日朝刊
- 144) 『朝日新聞』 2001年11月17日朝刊
- 145) 『読売新聞』 2001年7月15日朝刊
- 146) 『毎日新聞』 2001年12月1日朝刊
- 147) 拙稿「アメリカスポーツと人種—日米両国における研究の動向と展望—」『武藏大学人文学会雑誌』33.4 2002年。本稿の注1も参照のこと。

(2002年9月11日 受理)